OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students

プロフィール（Profile）

氏名（Name）赤崎　芙美
所属（School）看護学研究科
学年（Grade）1 年

留学先（Name of overseas institution）
Faculty of nursing,Mahidol University
留学期間（study abroad period）
2017 年 9 月 6 日～9 月 19 日
記入日（Date）9 月 26 日

留学レポート Study Abroad Report

<はじめに>

私は人生初めての留学であり、緊張していたが、本当に温かく迎え入れてくださった。英語も拙いものであったが、私が伝えようとしていることを一生懸命理解してくださり、コミュニケーションを図ることができた。

先生と学生との連絡手段もメールだけではなく、LINE も活用しており、先生と学生の距離が近いことが伺えた。距離が近いと言っても、学生は先生のことを心から尊敬していた。先生から学生に対するとても細やかな気遣いを感じることがあり、それが一つの理由ではないかと思った。

<タイでの基礎看護学教育>

今回の交換留学における、私の大きな目的が、「タイでの看護学教育の実際について学ぶ」ということであった。TrainingRoom は、日本における基礎看護学で使用する実習室であり、基礎看護学で使用する採血用のモデルや、シミュレーション用の人形などがあった。このシミュレーション用の人形は経鼻胃管が挿入されており、気管切開もされていた。私は今までにそのような人形は見たことがなく、医療依存度の高い患者へのケアの練習もできるため、ケアを学べるとても充実した設備となっていた。また、ロールプレイ用の部屋も見せていただいたが、そこはマジックミラーでいくつかの区画に分かれており、1 つの区画が、シミュレーション人形と学生がケアを行う部屋、もう 1 区画が他学生の待機する部屋、もう 1 区画から先生が見られるようになっている。そしてロールプレイが終わると、みんなでディスカッションを行うということだった。日本でも看護実践能力の向上のため、シミュレーション教育やロールプレイなどが行われているが、他の学生のロールプレイを見てディスカッションする機会は少ないように思う。そのため、このような機会を日本の看護教育でももっと活用していければよいのではないかと思った。

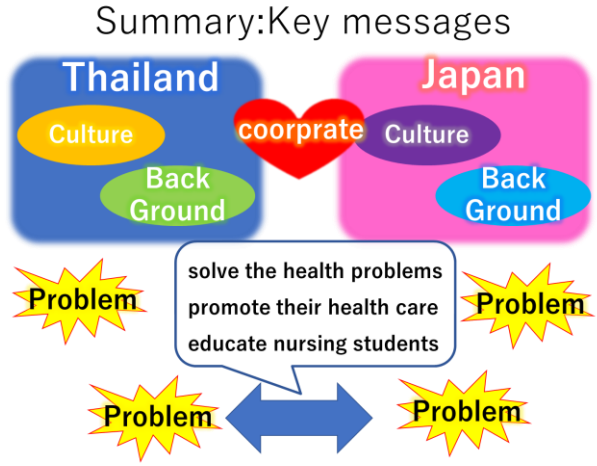
＜自己の研究に関するディスカッション＞

自分の現在興味がある研究内容について発表し、ディスカッションを行った。今回はインターナショナルコースの大学院生 4 名と、OPU 学生 2 名が参加した。インターナショナルコースはタイ人の学生が 2 人、中国とミャンマーからの留学生が 2 名であった。

インターナショナルコースの大学院生 2 名の発表は、研究の実施直前であり、研究内容についても、文献検討を行い、海外での状況とタイでの状況を比較した上で、研究の理論的枠組みを説明しており、綿密な研究計画のプレゼンであった。また、今後は尺度の使用許可も得るように、海外の研究者ともコンタクトを取っているそうだ。日本で研究を行うと国内の動向のみ調べ、日本語のみの発表になってしまいがちである。しかし、今後自分が研究を行っていく際には、海外での動向を汲んだ上で、世界に通用するような研究結果を出せるように努力していきたいと思った。

また、日本の看護を学びたいと思っていても、日本で看護のインターナショナルコースがある大学は数少なく、英語で日本の看護を学べる環境が整っていない。これはもったいないことだと、先生に言われたことが印象に残った。

逆に言えば、私が大学教育で看護を学んできた中で、今まで英語に触れる機会はほとんどなく、英論文を読んだり、海外から来られた先生の講義を聴いたりしたのは、大学院に進学してからであった。このように、海外での看護を学ぶこともちろんであるが、今度は日本の看護を世界へ発信していくことも重要なのではないかと感じた。そのためには、ツールとしての英語が必要である。今回、ディスカッションをして他国の看護を学ぶこともできたが、もっと自分の英語力があれば、自分の興味や考えを相手に正確に伝え、さらに深くディスカッションすることができるのにと考えると悔しかった。この悔しさをばねに、今後の英語学習へつなげていきたい。



＜Summary:Key messages＞

この図のように、タイと日本では異なった文化や歴史背景がある。しかし、両国で抱えている社会問題や看護に関する現状は似たようなものも多い。そのため、健康問題を解決したり、ヘルスケアを促進したり、基礎看護教育を行ったりするために、お互いに積極的に情報共有やディスカッションを行い、協力していきたい。

今回留学し、学生だけではなく、先生方や保健省の方など、日本にいるだけでは絶対に出逢えなかったさまざまな方と出逢うことができた。さらに、今回の留学では寮に滞在したことで、タイだけではなく、近隣のアジア圏からタイへ看護を学びに来ている学生とも接点を持つことができた。今まであまり意識していなかったが、世界中で自分と同じように看護を志している人がいて、それぞれに問題を抱えながらも、看護学の発展のために頑張っていると考えるだけで勇気をもらえた。現在はインターネットが普及し、LINE や Facebook などすぐにコミュニケーションを取れるツールも多い。そのため、今後はそれらを活用し、このつながりを宝物とし、看護というフィールドで同じ研究者として再会していけるように、自己の学びや研究を深めて行きたい。